

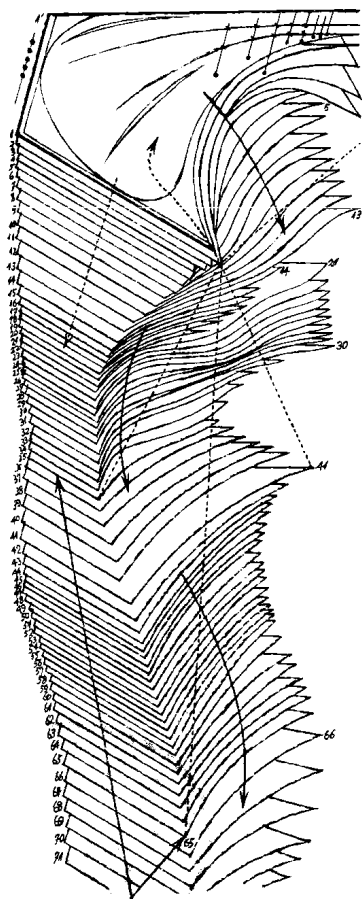
荒正人著作集

第四卷

宇宙文明論

荒正人著作集

第四卷 宇宙文明論



荒正人著作集 第四卷

1984年2月29日 第1版第1刷発行

著 者	荒 正 人
	© 荒 静枝 1984年
発 行 者	菊 地 喜 三 次
印 刷 所	株 式 会 社 厚 徳 社
製 本 所	東 京 美 術 紙 工
発行所	株 式 会 社 三 一 書 房
	東京都千代田区神田駿河台2の9
	電 話 03 (291) 3131～5 番
	振 替 東 京 9—84160 番
	郵便番号 101

落丁・乱丁本はおとりかえいたします Printed in Japan

荒正人著作集 第四卷／宇宙文明論／目次

I	
人工衛星時代	8
宇宙工学	18
宇宙旅行	23
宇宙小説	28
空想科学映画論	32
宇宙の拡がり	44
M87星雲	59
火星を見る	65
地球外の生命	70
サイバネティックス	74
人類愛	87

好奇心	108
恐怖心	124
宇宙文明論	138

Ⅱ

異端邪説	154
政治と文学	180
「近代」もまた伝統である	204
指導とビジネス	215
「雪どけ」(「スターリン批判」)をめぐって	227
想像力の貧しさ 予言的能力の欠如 水爆実験	
反省の少ない左翼論者 「雪どけ」以後の知識人	
旧職業軍人の盲点 戦争責任をめぐって 「粛清」	
について 覚えておきたいこと 「戦後」と別れる	
ために 民族主義と伝統について ハンガリーの悲	
劇 「雪どけ」は後戻りしない	

III

思想の流れ 278

1 古代東方諸国 278

2 ギリシア時代の思想 282

IV

人間と技術——文学的自伝 324

ふたりの宇宙馬鹿（解説） 337
 埴谷雄高

荒正人著作集

第四卷／宇宙文明論

本集に収録するに際して、各作品の漢字は新字体に改め（俗字・宛字は原文のまま）、仮名づかいは引用文以外、現代仮名づかいに統一し（送り仮名は原文のまま）、促音・拗音は小字で表記した。

I

人工衛星時代

人工衛星の打ち上げは、幾つかの意味をもつが、まず政治的なものについて考えてみたい。

第二次世界戦争は、原子爆弾の投下とともに終った。原子爆弾を發明したのはアメリカであつて、ロシアではなかつた。アメリカは、続いて水素爆弾を發明した。原子核エネルギーを武器に用いることについては、アメリカがロシアに一步先んじたのである。この間、緊張状態は一層激しくなり、冷戦が、部分的には熱戦に転化したのであつた。ところが、ロシアでも、原爆、水爆をつくりはじめた。緊張状態がいくらか緩和し、平和共存が成立するかにみえた。平和共存はむろん、兵器という要素だけで成り立つものではない。だが、現代のように激しい競争のなかでは、兵器、ことに、決定的な新兵器が、緊張状態を一層強めたり、また、弱めたりするのに、かなり大きな役割を演じるのは自明の理である。

決定的な兵器とは何であるか。弓矢で戦争をしていたときには、鉄砲がそれであつた。タンクや毒ガスが、決定的兵器になつたこともある。また、飛行機がそれであつたこともある。原子爆弾が出現するにおよんで、これこそ最終兵器であるかのように思われた。ところが、原子爆弾から水素爆弾が生れた。それはいろんな方法で、地球のどの地点にも自由に運んでゆくことができる。コバルト爆弾

という着想もある。原子爆弾をコバルトの殻で包み、それを爆発させて、地球の大気全体を放射能で満たすのである。こういう兵器ができれば、もはや戦争は不可能になるであろう。だが、実際はどうであろうか。

原子爆弾や水素爆弾の競争は、製造と実験の面で絶えず行われている。そのバランスが、両国間に保たれている場合には、戦争は起らぬ。だが、このバランスが崩れれば、平和はおびやかされる。両国の間に決定的な差がついてしまえば、それはまた、平和を生み出す要素になる。追いつかれつというときが、いちばん危険である。原水爆については、この危険な状態が続いていた。むろん平和は、武器の量や質によって保たれたり、破られたりするのではない。指導者や人民の意志ということも考えなければならぬ。だが現代では、幸か不幸か、武器という要素を大きく考えなければならぬ。それは、科学の進歩が、文字通り日進月歩だからである。飛行機がライト兄弟によって初めて飛ばされたのは、一九〇三年であった。五九秒、二五六メートルという記録であった。この記録と、現代の飛行機の発達ぶりを比較するならば、今世紀になってから技術がどのような速いテンポで発達しているか、誰しも納得するであろう。人類が征服したのは速度だけではない。物質の秘密をつかみ、そこから原子核エネルギーを取り出した。また、最近では、生命を人工で創ることが、真面目に論議されている。このめざましい発明発見も、二つの世界の緊張という悲しい政治の場では、必ず大量殺戮のための武器として悪用されるのである。科学者が、武器を好んで発明するのではない。科学者の創りだした技術が、武器として悪用されるのである。技術それ自体はいつも中立的なものである。原子核エネルギーは、大量殺戮の武器にもなるが、人類に無限のエネルギーを供給する根源ともなる。将来、人工生

命が創りだされたときにも、それ自体としては、善でも悪でもない。ただ、武器として悪用しようと思えば、いくらでもできるという危険性があるのである。

人工衛星についても、このことがはつきりといえる。このすばらしい技術は、現在のところ、中立的なものである。まだ何の役にも立たぬ。子供の玩具に似ている。だが、実験が繰り返され、性能がたかまるにつれて、いろんな用途が考えられる。ロシヤとしても、いまのところ、べつに武器として用いようとしているのではない。しかし、国際緊張の激しい現在では、当然武器として用いる可能性はある。アメリカの側でも、当然それに備えている。原子爆弾、水素爆弾と結びついた人工衛星は、おそらく最終兵器としての破壊力を振うであろう。相手の国の政治機構や、産業力を、一瞬にして滅ぼしてしまうであろう。むろん、受身に立ったアメリカとしても、指をくわえて見ているわけではない。やがて、同じような人工衛星を打ち上げるであろう。アメリカの技術陣は、ロシヤのそれに駆足で追いつくであろう。アメリカでうまくつくりだせぬ場合には、ロシヤから機密を盗みだすということも考えられなくはない。原水爆のときに行われた両国の競争を思いだすならば、人工衛星が、ロシヤだけの専有であると考えることはできない。

空想はできる。人工衛星をアメリカがどうしても創りだせぬという場合である。そのときアメリカは、ロシヤにたいして手をあげなければなくなる。世界の情勢は急変するであろう。地球の上には、単一の国家、単一の社会が生れるであろう。この過程には戦争はない。だがこれは、一片の夢物語である。人工衛星では、ロシヤがアメリカを大きく引き離すにしても、アメリカがどうしても創りだせぬという場合は考えることができない。現在では、一国だけが独占する技術というものは存在し

ないのである。こう見てくると、アメリカとロシヤの対立はますます激しくなり、国際情勢は、冷戦状態から熱戦状態に急速に転化するのではないか、という不安に襲われる。地球から千キロも離れた宇宙の入口に、何百、何千という人工衛星が、原爆、水爆を載せて飛びかう光景が実現するとしたら、それは人類の最後である。その後には、資本主義も社会主義も民族主義も残っていない。人類の文明は廃墟に帰してしまふ。これは決して夢物語ではない。

だが、人工衛星から導きだされる空想は、もつとべつな方向で考えることもできる。結論的にいつて宇宙時代の第一歩が踏みだされたという考え方である。人類はこれまで、地球の表面だけを活動の舞台としてきた。それは、地球全体の大きさから見れば薄い皮の部分にすぎぬ。むしろ、宇宙の大きさから考えれば、一粒の砂のその表面といったほどの狭さである。人類は、月にも火星にも金星にも飛んでゆくことができない。それが永遠の宿命であるかのごとく考えられていた。地球を脱けだす速度は、秒速約十二キロといわれている。そんな大きな速度は、人類が創り出すことのできぬものだときらめられていた。空想科学小説などでは、この速度で飛び出すために、引力を遮断する物質が考えられたりした。現代の科学では、そんな物質の存在は考えられぬ。とすれば、地球から脱出することは永遠に不可能ということになる。永遠に不可能ではないかもしれぬが、そんなに大きい速さを獲得するまでには、まだ多くの歳月が必要であると思われていた。数年前までは、人類が月の表面にまで達することのできるのは、今世紀の終りごろであろうといわれていた。それさえも、痴人の夢とされ、常識に富んだ市民からは、本気で相手にされなかったのである。人工衛星を中継にして飛び立つにしても、その人工衛星がまだ実現しないかぎり、宇宙旅行は一片の夢物語にすぎなかった。人工衛星

の理論や模型はいろいろと考えられたが、実際に飛び立つにはまだ間があると思われる。

人工衛星の打ち上げについては、アイゼンハワーの声明があったり、また、外電で断片的に伝えられるロシヤ側のニュースもあった。だが、何となく信じられなかったのは、人工衛星というものが、技術の歴史のなかで画期的なものであったからだと思う。原子核エネルギーを取り出したほどの人間の知恵ならば、人工衛星を打ち上げても決して不思議ではないのだが、実際にそうやってみないうちは、なかなか信用できぬのが、私たちの悲しい知恵なのである。だから、十一月七日、ロシヤ革命の記念日に、ロシヤのロケットが月まで飛んでゆくことに成功したとしても、そうやってみるまでは、なかなか信用ができないのである。この文章を書いているのは、まだ二十日ほど前なのだが、十中八九というよりは、十中十の確率で、まだそんなことはあるまいと考えているのである。むろん、その予想の破られることを望んでいるのである。

人工衛星の打ち上げに成功した日から、人類は人工衛星時代、或いは、宇宙時代にはいったといっても、決して誇張ではない。十一月七日には無理だとしても、無人ロケットが月面に到達するのは、数年のうちであろう。前後して、やはり無人ロケットが月をぐるりと廻って、地球に帰ってくるであろう。地球からは永久に眺めることのできなかった月の外側を、テレビに映したり、写真に撮ったりすることができたのである。そこには、大きな穴があとにあるかもしれない、というのは冗談にしても、これまで不可能であったことが可能になるということは、たしかにすばらしい出来事である。このことに成功してから、さらにまた数年たって、人類は最初の一步を月面に印するであろう。それはたしかに、人類の歴史始まって以来の重大事件である。人間が衛星とはいえ、他の天体に降り立つのである。

さて、天文学者は、月の世界については、地理学者がアフリカの奥地について知っているよりも多くのことを知っている、といっているに過ぎないのである。だが、実際にそうであろうか。月の世界については、いまでも判らぬことが多い。第一、あの噴火口に似た穴がどうしてできたか、ということさえ判っていない。月の世界にゆけば、その成因なども、多分判るであろう。最近、月の表面に金属の橋が見えたとか、噴火口が消えてしまったとか、いろいろ怪談じみた話があるが、そういうことは、いってみれば直ちに解決のつくことである。

月の世界には、金やウラニウムのほかに、宝石も多いという話もある。これまで誰も手をつけていないのだから、当然のことであろう。地球から出かけていって、運んでくることも考えられる。しかし、往復の費用のことを考えれば、地球の底ふかく探したほうが安上りであろう。月の世界にたどりついたからには、月の世界でなければできぬことをするのが、いちばん賢明である。たとえば、月に天文台を設ければ、それは大変効能の大きい天文台として役立つ。地球の天文台では、空気の厚い層の下から天空をのぞいているのだから、ちょうど海の底から表面をのぞくようなものである。ところが、月には空気がない。真空の世界に設けられた天文台は、空気の層の下で天文台の何倍という働きをするのであろう。だが、天文台は実用から遠い、と考える人もいよう。そういう人には、月が宇宙旅行の中継地として役立つことを教えなければならぬ。月からの脱出速度は、地球からの脱出速度の数分の一である。また、月は、人工の衛星とは較べものにならない広い面積をもっている。いろいろな設備をすることができる。地球の人工衛星も、大きくすれば、そこから火星や金星に飛んでゆくことはできる。しかし、それよりも、月を利用するほうが安上りである。人工衛星は、どんなに大きく

したところで、月の大きさにまですることはできないから。

月まで飛んでいったところで何の役にも立つまい、と思う人には、この中継所の役目を教えるがよい。しかし、そういう人は、火星や金星に飛んでいったところで仕方がないだろう、と反問するであろう。エベレストになぜ登るかと聞かれて、山がそこにあるから、と答えた話は有名である。宇宙旅行に出かけるのも、月や火星や金星がそこにあるからだ、と答えたほうがよいのかもしれない。人間が宇宙旅行に飛び立つのは、もし、戦争のためでなければ、無償の好奇心からするのだといえよう。アメリカで人工衛星をつくるために大童になっているブラウン博士は、ドイツにいたときは、V1号その他のロケット兵器をつくっていた。兵器をつくるのが目的ではなく、兵器は手段であった。ブラウン博士の最後の望みは月の世界に飛んでゆくことであった。「宇宙のコロンブス」になることが、ブラウン博士の秘かな望みだと噂されていた。ブラウン博士は、ドイツが敗れるとともに、アメリカに移ってきた。アメリカでも、軍部と提携して武器をつくるという口実のもとに、宇宙旅行の実現を企んでいるのだといわれている。このブラウン博士にしても、月の世界にゆくことが何かの実益を得るためだと考えているわけではない。技術者の無償の行為なのである。これは、ブラウン博士にかぎらず、この壮大な仕事にかかっている科学者や技術者に共通した希いであるかもしれない。

人類はまもなく月の世界に到着する。月を根拠地にして火星に飛び立つであろう。つぎに、金星にやってくであろう。金星にも火星にも、或る種の生命が存在しているらしいと考えられている。その生命は、多分、地球の生命とはかなり仕組みが異っているであろう。火星の運河は、最近、写真にも撮られている。自然のものであるか、或いはまた、何か高等な生物の大土木工事であるか、それと